特別寄稿

郷里と世界——中国広東省の僑郷から郷土史を考える

兵庫県立大学経済学部教授
園田節子

はじめに

『挟間史談』を一読して、私自身が無知のままである郷里・挟間の歴史に触れたことで、郷土史という視点について改めて考えてみた。また、挟間の歴史への接近法が足を使った現場主義をとっていること、つまり分散して保管収蔵されている史料を読むために足を運んだり、これまで知られていなかった史料を手に入れるために個人宅を訪れたり、現地に残る環境や行事を確かめたりと、楽しみながら身近な郷土に接していく文章が多いことから、中国で出会った中国人郷土史家たちが生き生きと故郷の歴史を語る姿を思い出した。

そこで私の専門である華僑・華人史から「郷里の歴史」という視点の広がりについて話題を提供するため、今の中華人民共和国の南部、広東省における郷土史を紹介したい。広東省には省都広州から電車で約二時間のところにかつてイギリスの植民地であった香港とポルトガル領であったマカオがあり、国際植民都市が省内中央に埋め込まれているという特異な地政条件を持った地域である。そしてその周囲に、「僑郷（きょうきょう）」——華僑の故郷と呼ばれる郷村がある。そのため、郷里の歴史がそのまま世界史につながっている。私たちには「郷土」や「郷里」と「国際」「世界」は対極にあるもののように感じられるが、そのようなつながりが直に表れている地域を見ることで、郷里というもののもつ意味の広さと特徴を考えてみたい。

一・「僑郷（きょうきょう）」という地域

華僑・華人とは中国を出て国外に生活と経済活動の拠点を持つ中国系の人々のことで、一般に、中国国籍を持ったまま国外に住む者を「華僑」、居住する国の国籍を取得した者を「華人」と呼び分けている。ここではより分かりやすくするため、「華僑」という表現に統一したい。

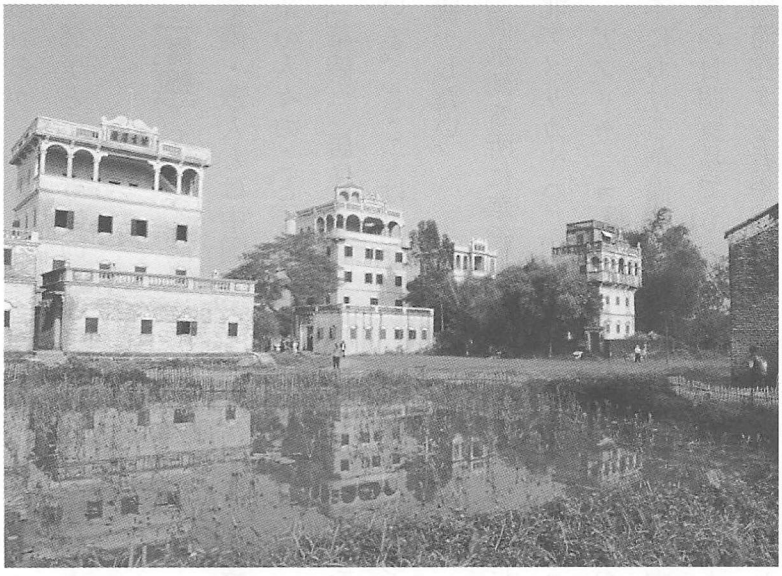
「海水到る所に華僑あり」という表現が俗にあるように、華僑は南北アメリカやハワイ、カリブ海地域、オーストラリア、東南アジア、アフリカ、ヨーロッパとあらゆるところでその姿がみられる。日本における華僑の活動は平清盛の時代の日宋貿易から始まり、その後の日明貿易でも福建省からやって来る商人が九州各地で活動し、長期滞在する者や、やがては帰化する者が現れて、中世の九州には十か所ほどの「唐坊」「唐人街」が作られていたことが解っている（和田・黒木、二〇〇六、四〇～四六頁）。このとき中国人商人が現れたのは日本のみではなかった。福建省と定期的な交易活動がおこなわれた東南アジアや朝鮮半島といった中国と地理的に近い東アジアと東南アジアにも、最初の華僑の姿や唐人街の形成が確認されている（斯波、一九九〇、一七二～一七三頁）。日本地理全体から見ても九州は中国大陸に比較的近く、このため早期からアジアとの交流が生まれ、最初の在日華僑の足跡が九州各地に残っているのである。

大分には、大友宗麟の府内城下町に唐人街があったが、これは日本で最も早く華僑が活動した沖縄県那覇市の久米村、長崎県五島の福江、鹿児島県坊津の久志、宮崎県南郷村の外之浦の唐人街と同時期、すなわち十五世紀初頭から十六世紀前半の間に作られたものであった（和田・黒木、二〇〇六、四三頁）。

もっとも、華僑が今のように世界各地に広く拡散して住みはじめるのはさらに後の時代、中国において清朝（一六三六～一九一一）が一八四〇年アヘン戦争に敗北して以降である。

中国では十八世紀中葉にはすでに可耕地が尽き、その一方で人口が急増して人々の生活が圧迫されはじめ、囲い込まれた小作農や破産農民が増加していたが、なかでも福建省と広東省でこの傾向が顕著であった。そして十九世紀半ばに清朝がアヘン戦争に敗北し、一八四二年に南京条約を締結したことによって、とくに広東省に大きな変化が起こった。イギリスに割譲した香港はじめ諸外国に開かれた汕頭、広州などの開港場都市が広東省内に増えると、これらの港湾都市ではじまった諸外国の経済活動のなかには貿易のみならず、外国公私企業が中国人に海外での契約労働を呼びかける、いわゆる労働移民の募集活動もあった。失業者や破産農民などそれまで広東社会に蓄積されてきた行き場のない流動人口が、これに応じた。こうして諸外国と労働契約を結んだ人々が、途切れることなく海外に渡航していく時代に入っていったのである。アヘン戦争後に広東省から諸外国に行った人々は、従来福建省から海外へ出ていた華僑と異なり、一気に遠くに渡る特徴があった。広東華僑は十九世紀半ばから、カナダ、アメリカといった北米、パナマ、エクアドルのような中米、キューバ、トリニダード・トバゴ、ジャマイカ、ガイアナのようなカリブ海地域、ペルーやチリのような南米、そしてオーストラリアといった地域に渡航していった。なお同時期の日本では、幕末に開港された長崎、神戸、横浜、函館いずれにも中華街が形成されたが、ここにも大勢の広東華僑が参入している。なお、中国人労働者の海外出国は一八八〇年代にいったん止まるが、それ以降も中国国内の政治・経済・社会の不安定化が続いたことから人々の出国は続いていった。

【写真１】広東省開平市自力村の碉楼群。（2013年筆者撮影）

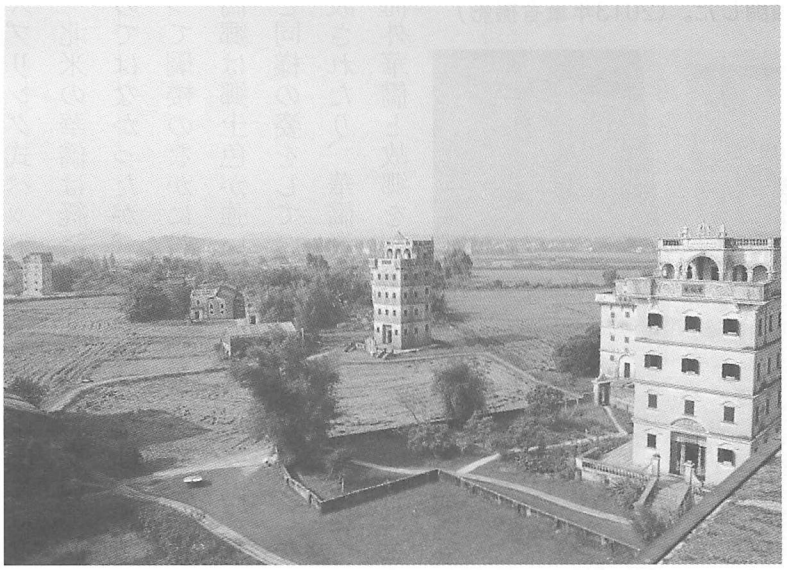


さて、現在中国では、とりわけ福建省と広東省の二省に華僑の故郷である僑郷が集中している。特に広東省の僑郷は、日宋貿易時代のような古い時代ではなく、アヘン戦争以降に中国を出国した華僑たちの故郷である。

僑郷の特徴的な風景は、貧しい村落共同体の真っただ中に

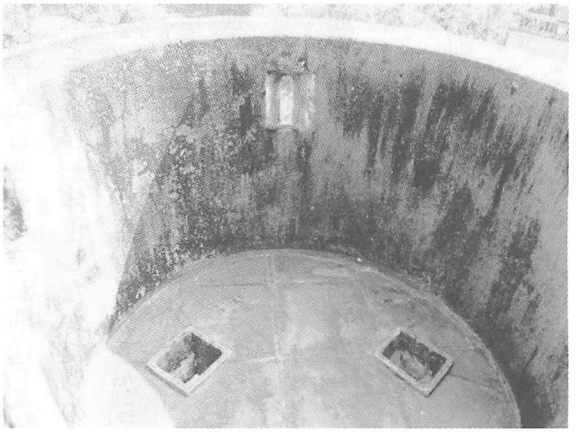
近代的建造物や近代産業インフラが出現しているアンバランスさである。二〇〇七年に世界遺産に登録された広東省開平市の特徴的な建造物「碉楼（ちょうろう）」群はその好例である【写真1】。この地域から国外に出稼ぎのために渡航した人々は、東南アジアでも日本でもなく、カナダやアメリカに渡っており、これらの碉楼は一九二〇～三〇年代に華僑の送金によって建てられた個人宅である。この村から北米へ出稼ぎに行く華僑がそれぞれ村に残る家族に送金し、それぞれが碉楼を建てたためこうした景観になった【写真2】。

【写真2】碉楼群を上から俯瞰。（2013年筆者撮影）



碉楼は一見、西洋建築を模した作りに見える。確かに建物の破風や扉など要所に西洋風装飾が入ってはいるものの、この建築様式そのものはアメリカにもカナダにもないもので、具体的にどの地域のどの建築物を模したものかは定かでない。有力な説は、東南アジアからの葉書に描かれた絵を基にして、農村部に暮らす建築学の素養がない人々が図面をおこしたというもので、実際、この建築群は多くが下の階に比べて上の階が大きく、不安定で危険な構造だとして建築専門家が避ける様式である。

碉楼群は遠目にも良く目立つため、匪賊と呼ばれる武装した盗賊集団は、華僑送金で潤う人々が住む村と見なしてしばしば襲撃した。そのためいずれの碉楼も内部に立てこもれるよう堅固な作りであって、一見飾りに見える四隅には銃眼が開けられ、襲撃してきた匪賊を釣瓶打ちにできるよう自衛の構えを備えていた。【右写真上】【右写真下】

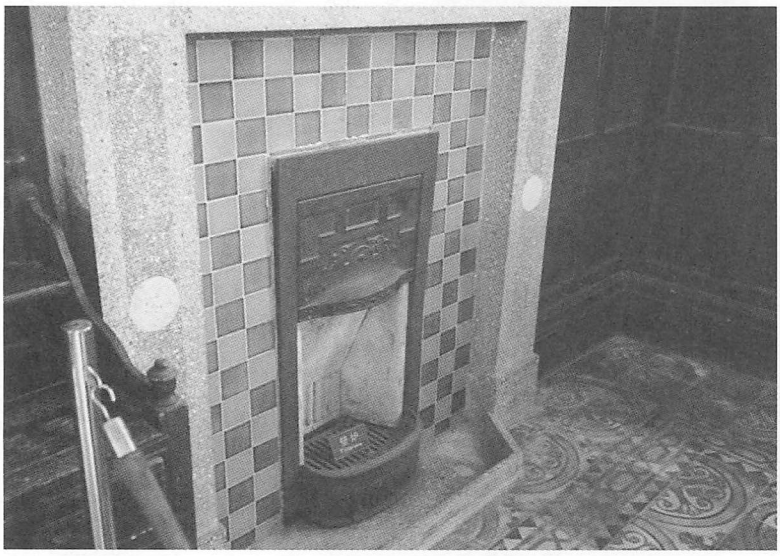


碉楼内部は、華僑たちが北米で目にした近代的な生活様式を少しでも故郷での生活に取り込もうと、タイル、水洗トイレ、シャワー

やスプリング式ベッドなど、当時中国にはなかった設備を設けている。北米の華僑は経済状態や当時の交通の面から頻繁に帰国できるものではなかったが、帰国の機会には少しずつこうした設備を持ち帰って碉楼のなかに設置したのである【写真3】。

僑郷は郷土色が強いため、すべての僑郷がこの広東省開平市自力村と同様の姿をしているわけではない。しかし、華僑資本の鉄道が敷設されたり、華僑資本の百貨店ビルが建ったりと、いずれの僑郷も海外華僑と故郷をつなぐ特徴的な地域色を持っている。

【写真3】開平市立園の謝氏邸内のタイル張り暖炉。亜熱帯の広東省で暖炉は不要だが北米風を強調した。(2013年筆者撮影)



僑郷研究は現在、広東省ならびに福建省で最も研究が盛んになっており、各大学には中国政府から多額の研究費が落ちている。こうした研究は一地方を扱う地方史研究なのだが、中国は一つの省が広大で一つの国家規模の面積を持ち、しかも歴史的にも先史時代から多様で豊かな地域性を有しているため、この「地方史」は一国史に該当する史料の蓄積と多様性を持っているのである。

二、僑郷と海外華僑とのつながり

(一) 華僑送金

海外に出た人々の家族が故郷にいる限り、海外華僑と僑郷の間のつながりは薄まることがない。そうしたつながりを強化したものが華僑送金である。

華僑送金は、広東省や福建省でそれぞれ「銀信」や「僑批」と呼ばれていた。華僑送金の独自性は、現金や為替、手形、小切手など送金そのものである「銀」と家族や縁者に宛てた手紙「信」の二種類を同封して故地の家族に送るかたちをとるところで、アメリカのイタリア移民が手紙は郵送し、送金は銀行からとそれぞれ別送したスタイルからは対照的であった。手紙と送金が一体化したかたちの華僑送金は北米やハワイからは一八六〇年代から、東南アジアからは二〇世紀初頭から急増し、一九二〇～三〇年代がピークであった。また、手紙と送金が一体化した独自の性格ゆえに、安全かつ迅速に送ることができて、外国為替レート変動の影響をできるだけ受けず、雑種幣制をとる当時の中国で通貨的価値が過度に弱くならない、そのような送金の体制が必要になってくる。そのため、送金を中継する機関や地域には華僑の地縁や血縁者がいて、確実に送金し配達するネットワークが作られた(劉・李、二〇一一、二～八、三八～四八、七四～八〇、九四頁)。

おもしろいことに、華僑送金を受け取るうちに、広東省や福建省にもともとあった地域金融が大きく変わっていった。海外華僑の人数が増え、華僑送金の額も増加してくると、前近代から存在していた伝統的な商店が送金業務を兼営するようになり、多様な民間金融機関のひとつに発展した。二〇世紀前半には銀行小切手や銀行為替手形が主となり、銀行や郵便局を通して送金されるようになる。しかし、国外から中国国内に直接送金できる中国銀行の支店数が限られていたため、国外では契約関係にある外国銀行が送金業務を代行し、国内では民間金融や民間銀行、郵便局といった新しい機関までも華僑送金に対応し、複数の経路の送金ネットワークができあがっていった（前掲書、三四～八六頁）。

華僑送金の多くは僑郷の家族を支える扶養送金であったが、そのの出身地の近代化や公共事業、慈善のための寄付や日中戦争時の献金といった愛郷送金・愛国送金もおこなわれるようになり、二〇世紀後半まで中国の赤字の貿易収支を補填していた。一九七八年から鄧小平の主導によって改革・開放路線がとられると、華僑送金は経済特区が集中する南中国で市場経済が成長していく初期段階で大きく貢献した。さらに、出国者数の増加にともなって、一九九〇年代から今に至るまで華僑送金の金額はますます増大している（山岸、二〇〇五）。

現在の中華人民共和国の在り方からは想像するのが難しいが、もともと中国は歴史的に、政府がおこなう地域社会の管理と統率はきわめて放任的であった。表面的には統一的で中央集権的に見えるのだが、政府が最大の関心を払って民間社会に接するのは徴税の時だけだった。このため民間地域社会は血縁や地縁、業縁などの中間団体をつくり、自律的に成員個人の利益を実現してきた（村松、一九七五、一〇五～一七八頁）。華僑と僑郷をつなぐさまざまな仕組みもまた、民間社会で生まれ、高度に発展していったのである。

（二）「ペーパー・サン」

広東省の僑郷のひとつである台山市もまた、東南アジアや日本よりもアメリカやカナダ、中南米へと多くの華僑を輩出した地域である。ここで発達したのは、端的に言って不法入国の技術である。

ただし、それは十九世紀末から二〇世紀半ばまでの間、アメリカやカナダに無事入国するために編み出された特定の目的に拠るもので、一概に犯罪の手法とも決めつけ難い。というのも、アメリカは一八八二年から一九四三年まで、カナダは一八八五年から一九四七年まで中国人の入国と帰化を禁じる人種差別的な連邦法を布いていた。この法律は一般に「中国人排斥法」「排華法」と呼ばれ、人種差別的観点から中国人を排斥しており、加えて二〇世紀に入るとアジア人一般にその差別を延長して、日本人移民もまた一九二〇年代前半にアメリカでもカナダでも帰化権を剥奪されたのである。ところが二〇世紀前半の中国では、軍閥の戦闘や国民党と共産党の間の戦闘、匪賊の跋扈による国内不安が続いたため、中国人排斥法時代であっても、人々は生き延びる道を探して豊かなアメリカやカナダに希望を抱き、北米をめざしたのである。

入国制限をされた中国人がアメリカに合法的に上陸する手段は、何よりもまずアメリカの国籍あるいは市民権を持っている中国人がアメリカ国外で生んだ子どもであると申告することであった。アメリカでは一八五五年まで華僑にアメリカ国籍の取得を許していた。また一九〇六年にサンフランシスコで大地震が起こり、市内の公共機関の多くが災害の中で書類を焼失した後、自己申告に拠ってアメリカ市民権を与えたのである。よって、要は、一八五五年までに国籍を取得した華僑の子ども、あるいは一九〇六年の自己申告で市民であると申告した華僑の子どもであることをアメリカ入国時の審査で証明できれば、中国人排斥法時代でも北米に入国することができた。アメリカの入国審査では、この書類内容とともに、過去に出入国した親や縁者の入国審査での口述内容を遡って照合し、これらに齟齬がなければ上陸を許可した。

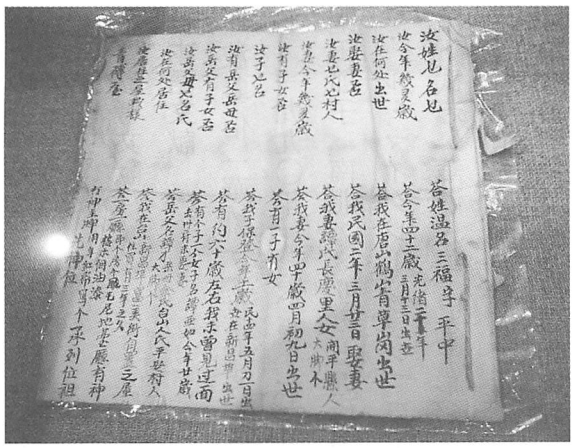
【写真４】米国入国審査を再現した蝋人形。広東省江門市の五邑華僑博物館（2013年筆者撮影）

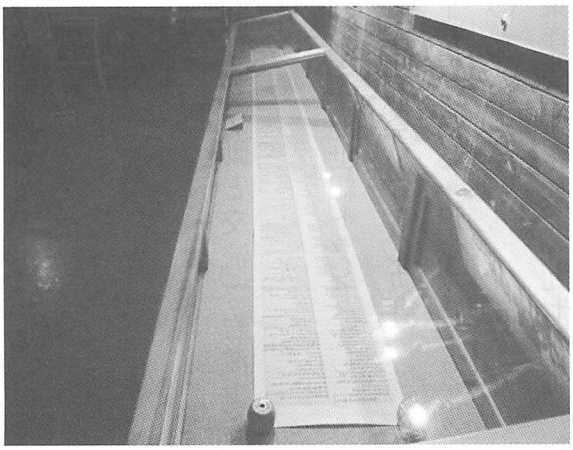
この条件を踏まえて、広東省台山で高度に発達したスロット・ケースと呼ばれる技術がある。アメリカ市民である華僑が中国に一時帰国した時に出生した子供であると偽った書類を用意する。この書類は市民権を有する華僑が帰国時に複数作成し、実際に出生していない子どもの分を、僑郷に住むアメリカへの移民を希望する者に売る。購入した移民希望者は、その架空の人物の詳細な個人情報を事前にまるごと暗記し、アメリカの入国審査における面接で暗記した内容通りに答えることで上陸を果たす【写真４】。この方法をスロット・ケースと称するのである。他者になりすますこの方法で入国した華僑は「ペーパー・サン paper son」、すなわち「書類上の息子」と呼ばれる。ペーパー・サンの人数は推計が難しいが、一九〇〇～二〇年の間に米国市民として入国した人数は全入国数の四割未満から七割以上へと不自然に激増し、一九二〇～四〇年の間に米国市民として入国した人数は約七万一千人、再入国など別枠による入国数の約一・〇七倍であった（Hsu, 2000, pp.74-80）。

入国審査をおこなうアメリカ移民局も、この不自然な数とペーパー・サンのからくりに気がついており、対策として入国審査での面接で、必要以上に微に入り細を穿った質問をした。親の名前、祖父母の名前、出身地の地名はもちろん、実家の台所にある椅子の背もたれの形、郷里にある池の形など、異様なほど詳細な面接をおこなった。そして入国希望者の答えが過去の面接における回答と異なる応えであった場合、ペーパー・サンの疑いがあると見なした。

これに対して生み出されたのが、面接に備える「口供紙」である。口供紙とは、架空の人物あるいは合法的な入国の場合でもペーパー・サンの疑いをかけられないよう準備する暗記用紙のことである。入国審査前に細かい個人情報を完全に覚えられるよう、口供紙

には様々な工夫が凝らされた。例えば当初は一枚の紙に人物情報を書き込み、これをアメリカに渡る船の中で暗記し、覚えたら証拠隠滅のためにアメリカ到着前に海に捨てる。しかし、後の時代になればなるほど暗記すべき情報量は増えていく。このため、口供紙は冊子【左写真上】や果ては巻物の形をとるようになり、船内ではなく僑郷で数か月かけて暗記するようになった。そして暗記し易いように、審査官と入国希望者の会話式で書かれるようになった。膨大な情報をなんとか暗記できるよう、工夫したのである。現在、広東省江門市の五邑華僑博物館にはスロット・ケースで実際に用いられた口供紙が数多く収蔵されているが、その中の一九三一年の口供紙は巻物式・会話式で書かれ、その情報量が写真の通り、凄まじい分量に膨れ上がっている【左写真下】。





書類の売買や審査の傾向変化などを正確に知るために、僑郷の内部や帰郷したアメリカの華僑と僑郷の人々との間では、盛んに情報が交換され、精神的つながりが強まった。そしてその結果、アメリカ華僑社会と僑郷とが太平洋を跨いだ共同体として成長していった(*Ibid.* pp.81-89)。つまり、皮肉なことに北米の差別的な中国人排斥法は、入国が困難であったからこそ、海外の華僑と中国の僑郷とのつながりが強化され、途切れない不法移民の流れを生み出すことになっていったのである。

おわりに

中国広東省の僑郷の事例からは、華僑にとって、故郷は国外に出る前に必要な準備やテクニックを身につける場であり、国外に出た後でも手紙や送金によるつながりを維持している場であった。国外生活は国内生活の延長であって、国外生活と海外生活が結び合い絡まり合った生活を営んでいったのである。そうであったからこそ、僑郷の歴史は、郷土史であるとともに国際関係史であり、世界史であるという多様な顔を持っている。

私たちの郷里の歴史には、このような、世界とつながる歴史的経験はないのだろうか。日本の移民がブラジルやペルー、ハワイや満州などに移民・植民した歴史があり、この中には多くはないが大分県出身者が含まれている。挟間からではどうだろうか。移民に代表されるような、郷土と世界や国際関係がつながる何かは挟間にはあるか。地域社会における情報や経験が残っている限り、そのような

歴史の掘り起こしに挑戦するのもまた興味深いと感じている。

主要参考文献

日本語文献

斯波義信「華僑」『世界史への問い3移動と交流』岩波書店、一九九〇年、一六七～一九五頁。

園田節子『南北アメリカと近代中国――十九世紀トランスナショナル・マイグレーション』東京大学出版会、二〇〇九年。

濱下武志『華僑・華人と中華網――移民・交易・送金ネットワークの構造と展開』岩波書店、二〇一三年。

村松祐次『中国経済の社会態制』東洋経済新報社、一九七五年。

山岸猛『華僑送金：現代中国経済の分析』論創社、二〇〇五年。

和田正弘・黒木国泰編『華僑ネットワークと九州』中国書店、二〇〇六年。

中国語文献

劉進、李文照《銀信与五邑僑郷社会》広東人民出版社、二〇一一年

英語文献

Hsu, Madeline Yuan-yin, *Dreaming of Gold, Dreaming of Home: Transnationalism and Migration between the United States and South China, 1882-1943*, Stanford, California: Stanford University Press, 2000.

園田節子さん（兵庫県神戸市在住）は園田由紀子会員の長女です。